

日本テクニカルアナリスト協会

年間優秀論文賞の記念講演会 「集合知AIは投資成果向上に有効」

2017年5月31日、日本テクニカルアナリスト協会（NTAA）は、国際テクニカルアナリスト連盟（IFTA）ジョン・ブルークス賞を受賞した鈴木智也氏を迎えて、受賞記念講演を開催した。当日の様子を紹介する。

ジョン・ブルークス賞は、国際テクニカルアナリスト連盟（IFTA）功労者のジョン・C・ブルークス氏の死後、その功績を記念して作られたもので、テクニカル分析の世界におけ

る年間最優秀論文賞だ。

講演では、同賞を受賞した茨城大学工学部知能システム工学科教授の鈴木智也氏が、「AI（人工知能）の集合知による機械的テクニカル戦略～コンセンサスレシオによる動的銘柄選択～」をテーマに自身の研究内容を紹介した。

これまで、過去の株価変動のデータをAIに学ばせて将来の株価を予測する研究は存在した。鈴木氏は、従来の研究に加えて、集

性が増すという定理だ。

この定理に基づき、独立する複数のAIから多数決をとり平均値を算出することで、予測精度は向上する。さらに、導かれるデータの確信度を測るため標準偏差に着目することで、売買判断の正確性向上につなげる。鈴木氏は、「集合知AIに平均値と標準偏差を組み合わせれば、投資成果の向上につながる」と語る。

鈴木氏の研究成果は、テクニカル分析における予測精度を大きく飛躍させると期待されている。ただし、「実際に金融ビジネスの現場に導入されるまでの道のりは険しく、金融機関に興味を持ってもらうには、実証実験を繰り返し、取引精度が向上するという裏付けが求められる」と話す。

さらに鈴木氏は、同分野の研究発展における課題として、「学術機関と実務を行う金融機関がそれぞれに持つ知見を共有できる場が必要」と指摘。NTAAはその役割を担

う重要な位置づけにあると提言する。

日本テクニカルアナリスト協会は、テクニカル分析理論の教育普及活動や分析理論の向上などを通じて、健全な投資活動や経済

活動の発展に寄与することを目的に1978年に設立されたNPO法人だ。現在、会員は約2600名。国際テクニカルアナリスト連盟に加盟する団体の中で最大規模を誇る。

「ボリンジャー・バンド」開発者を 招いた日本株投資セミナーを開催

日本テクニカルアナリスト協会は、2017年5月20日に福岡でボリンジャー・バンド（標準偏差バンド）の産みの親であるジョン・ボリンジャー氏を招き、講演会を開催した。

セミナーの冒頭では、「AIを取り巻く最新動向とテクニカル分析を活用した日本株投資」と題し、日本テクニカルアナリスト協会副理事長の福永博之氏と、評議員の中村貴司氏が講演を行った。中村氏は、「AIなどを運用に取り入れる電子取引業者の増加により、市場の短期のボラティリティは高まってきている」と指摘。こうした環境のなかでも、「5日、25日、75日の3つの移動平均線のどれを見るかを適切に見極めれば、従来の分析手法で精度の高い相場予測が可能だ」と福永氏

は語る。

続いて、ジョン・ボリンジャー氏が登壇。自身の開発した「ボリンジャー・バンド」を解説した。ボリンジャー氏は、「移動平均線に標準偏差の要素を組み合わせることで、値動きのどこが上限・下限かを示したのがボリンジャー・バンドだ。実際の株価の値動きとバンドを比較すれば、適切な売買のタイミングを示してくれるだろう」と語った。同協会は11月に東京、大阪で第2弾、第3弾の講演会を開催予定。



ジョン・ブルークス賞の受賞は日本人として3人目

合知定理の考え方に基づき、複数のAIの回答を多数決にかけ「集合知AI」を活用する。集合知定理とは、例えば、競馬のオッズ（倍率）が勝率に対して強い相関性を示すように、意見の多様性が増すと互いの誤差を打ち消し合う結果として、全体の意見の正確